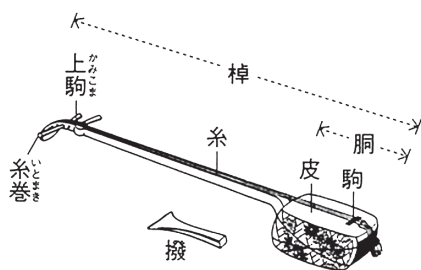


しや み せん
三味線音楽

【三味線音楽】 日本の三味線は、中国の三弦がまず琉球に伝わり、16世紀中ごろに琉球から大坂方面へ伝わった楽器を改造したものといわれている。江戸時代にさまざまな三味線音楽が生まれ、文楽や歌舞伎の伴奏音楽として、また家庭音楽としても親しまれた。明治時代以降も新たな作曲、演奏活動が行われ現在に至っている。三味線音楽は、三味線のパートと声のパートから成り、曲によっては箏、囃子などとの合奏も行う音楽の総称である。大きく歌い物と語り物に分けると、歌い物の代表として地歌、長唄が、語り物の代表として義太夫節があげられる。歌い物の演奏では、どちらかといえば三味線のパートが声のパートをリードするのに対し、語り物では、声のパートが三味線のパートをリードしている。沖縄の三線については「沖縄・奄美の音楽」の項を参照されたい。

【三味線】

三味線の各部分および付属品の名称



棹 堅い紅木が上質とされる。長唄三味線を細棹、義太夫三味線を太棹と呼ぶこともある。

胴 材質は花梨。胴革は、演奏会用三味線には音色のよい猫の革を張るが、破れやすいことと高価なため、練習用には犬革や合成皮革も多用される。

サワリ 一の糸（一番太い糸）を上駒から外し、サワリ山という、棹が少し高くなっている部分に触れさせることにより、一の糸の開放弦または、そのいくつかの倍音に当たる音高を撥弦した時に、ピンという特殊な響きを出す仕掛けのこと。沖縄の三線や中国の三弦にはない。

糸 絹糸。三の糸（一番細い糸）だけは、練習時な

どに、切れにくいナイロン糸を用いることもある。

駒 種目により素材、寸法など異なる。

撥 種目により形状、寸法など異なるが、沖縄三線や中国三弦に比べて、大きな撥を用いるのが特徴である。

【種目：歌い物】

地歌 専門芸としての三味線音楽では最も古い歴史をもつ、上方を中心に伝承されてきた家庭音楽。三味線と箏の合奏、三曲合奏（三味線、箏と胡弓または尺八との合奏）など、箏曲との結びつきが強い。地歌舞という舞の伴奏も行う。

長唄 18世紀前半に江戸の歌舞伎音楽として成立。19世紀には舞踊の伴奏でない曲も作曲されるようになり、20世紀に入って、舞踊の会とは別に演奏会形式が確立した。合方やタマという、唄のない部分での三味線の派手な演奏技巧が特徴である。

端唄・うた沢・小唄 江戸時代末期に生まれた小品の種目で、お座敷などで唄われる。

【種目：語り物】

浄瑠璃 三味線音楽の語り物の総称。狭義には、義太夫節、あるいは語り物の語り物のパートを指す。

義太夫節 竹本義太夫(1651 - 1714)が1685年に大坂で始めた人形浄瑠璃(今の文楽)の音楽。詞(台詞の部分)に関西のアクセントが認められる。義太夫三味線の音域は、他種目の三味線より4~5度低い。

一中節 都太夫一中(1650 - 1724)が京都で始めた温雅な浄瑠璃。

河東節 十寸見河東(1684 - 1725)が1717年に江戸で始めた浄瑠璃。

豊後系浄瑠璃 一中節から出た豊後節の系統をひく浄瑠璃の総称。

常磐津節 常磐津文字太夫(1709? - 81)が1747年に江戸で始めた硬派の豊後系浄瑠璃。

新内節 18世紀後半に江戸で生まれた豊後系浄瑠璃。2人が三味線の本手と上調子を合奏しながら歩く「新内流し」は、新内特有の形態である。

清元節 清元延寿太夫(1777 - 1825)が19世紀初頭に江戸で始めた豊後系浄瑠璃。高音から始める語り出しの部分に特徴がある。